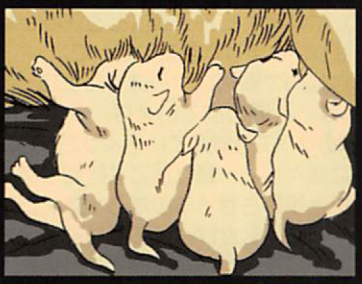


監修 財団法人 関西盲導犬協会

全国の人々の瞳を
感動の涙で濡らせた
あの物語

静かに、いっしょうけんめい生きました……。
クイールは、ずっとあなたのそばにいます。



盲導犬クイールの一生

文・石黒謙吾 / 写真・秋元良平 (文藝春秋刊)

本作品の売上の一部は、「クイール基金」
(盲導犬の育成と盲導犬訓練士・盲導犬歩行
指導員の養成のために活用)に使われます。

バリアフリー版もあります。
(副音声・字幕スーパー付)

アニメーション 25分

16mm 価格 ¥ 250,000 (税別)
VHS 価格 ¥ 60,000 (税別)
学校価格 ¥ 30,000 (税別)



盲導犬クイールの一生

「人間らしい歩き方を思い出させてくれた」

「盲導犬は、ただ道を教えてくれるだけとと思っていましたが、でも違いました。いっしょにいただけで気持ちを明るくしてくれる。友だちなんですね」

パートナー 渡辺 満

あらすじ

1998年7月20日この日クイールの呼吸は朝から荒かった。心配そうに見守る仁井さん夫妻とファンタ。

1986年6月25日 東京・杉並 水戸さんの家の一室で5匹の仔犬が生まれた。水戸さんは、1匹のオスの仔犬のわき腹に黒いシミのような模様を見つける。ラブラドルでは単色でブチは生まれてこないはずなのに…。模様はカモメが翼を広げて飛んでいるようにも見え、『カモメのジョナサン』にちなんでジョナサンと名付けられた。この犬が後のクイールなのだ。水戸さんは、5匹の仔犬の世話を追われる忙しい毎日を送る。水戸さんは、5匹のうち1匹でも盲導犬になれないだろうか…。ベテランのブリーダーに適性判断をしてもらう。「この2匹なら、どちらでもいいと思う」と言うブリーダーに水戸さんは、ジョナサンに決める。わき腹にある黒い十字型の模様に因縁めいたものを感じていたからであった。ジョナサンが、盲導犬になるための第一歩を踏み出した瞬間であった。盲導犬は、生涯何度かの別れをしなければならぬ。最初の別れは、生後43日目に行ってきた。パピーウォーカーと呼ばれる《育ての親》の元へ行くのである。

京都に住む仁井勇、三都子さんは、ジョナサンの到着するのを今か今かと待っていた。盲導犬訓練士の多和田さんに連れてこられたジョナサン。名前もクイールに。鳥の羽根という意味である。多和田さんは、クイールを預けるときに、「この子は、何があっても叱らないでください」と頼みごとをする。長年の経験から、叱らずに育てることがクイールの盲導犬としての適性を伸ばす良い方法だと感じていた。やんちゃぶりを発揮するクイール。三都子さんは、ことあるごとに話しかけ、行動は、寝る時以外、何をすることも、どこへ行くにも一緒であった。近所の人・犬・自然にふれあう機会をつくり、教えていくのもパピーウォーカーのつとめでもある。瞬く間に八ヶ月は過ぎ、二度目の別れがやってきた。盲導犬として働き出すと、昔を思い出さないようにパピーウォーカーとは自由に会えない決まりになっている。仁井さん夫妻はいつもより長い散歩を終え、クイールを送り出すのであった。盲導犬訓練センターでの生活が始まった。多くの盲導犬を育て上げ「魔術師」の異名をとる多和田さんによる訓練だ。最初はこずったクイールも素直な性格から着実に訓練をこなしていった。訓練センターにやってくる一年半。盲導犬と呼ばれるようになる日は確実に近づいていた。「犬に牽かれるなら死んだほうがましだ」あまり犬好きとはいえない中途失明の渡辺さんは頑固にそう

言い張っていた。しかし、周囲の人々の強いすすめに、しぶしぶ従うことにした。多和田さんは、渡辺さんとの相性を見て、クイールを選んだ。訓練センター内で4週間におよぶ共同訓練が終わるころには、渡辺さんの盲導犬に対する認識はまるで違うものになっていた。「盲導犬がこんなにすばらしいパートナーだとは思わなかったよ」と思わず漏らすのだった。クイールが渡辺さん夫妻とすごして2年がたった頃、渡辺さんは重い腎臓病にかかり入院してしまう。クイールは訓練センターに戻ることにになり、退院したらいつでも働けるように待機することになった。気がつくと3年の月日が流れていた。ますます体調が悪化した渡辺さんは「訓練センターに行きたい…クイールに会いたい」と奥さんの祺子(よしこ)さんに頼む。再会したふたり。「クー、もう一回いっしょに歩こう」クイールは渡辺さんのいない3年間この瞬間をひたすら待ち続けてきたのであった。ゆっくりと歩き出すふたり。クイールは、渡辺さんの体調を気遣うように歩き、渡辺さんは、会いたかった思いを噛みしめるように歩く。それもわずか30メートルで終わってしまう。「…ありがとう…」クイールにそう言うと、自分の手でハーネスを外し、いとおしむよう優しくなるのであった。渡辺さんが亡くなる一週間前の出来事だった。パートナーを失ったクイールは、デモンストレーション犬として再出発することになる。ある日、出番を待つクイールは、体育館の片隅にじっと目をやっていた。そこには、あの懐かしい仁井さん夫妻の姿があった。しかし、決して駆け寄るようなことはせず、目で追うことで懐かしさを表現していた。やがて、仁井夫妻はある決心をする。クイールを引き取らせて欲しいと申し入れたのだった。

《育ての親》のもとに戻るのは極めて異例なケースであった。十年ぶりに里帰りしたクイールは、人間の歳でいえば、60歳になっていた。クイールは仁井家のすべてを覚えているようだった。しかし、クイールは見るからに弱々しく一緒に過ごす時間はあまり残されていないかも知れないと予感させるものがあった。仁井さん夫妻は、かつてのように一日中話しかけ、くる日もくる日も回復を願っていた。そのかいあってか少しずつ回復し、お気に入りの散歩コースを自分の意志で歩けるようにもなった。もう盲導犬ではない。仁井さん夫妻は、自由に歩きたいように歩かせた。そんなクイールに異変が起きる。散歩の回数が減り、食欲もめっきり落ちてしまった。検査の結果、極度の貧血…さらに白血病の疑いが…。

●お問い合わせ・お買い上げは

(株)オプチカル 販売課 教育映像係

香川県高松市屋島西町2484-8

TEL 087-841-1100

FAX 087-841-1101